

困った場面における両親への信頼感と 自己開放性についての一研究

久世敏雄・蔭山英順¹⁾ほか 過疎研究グループ

I 問 題

われわれは、困った場面、困難な事態において、青年がどの程度、周囲の人びとに自己を開放するかの問題を、中学生および大学生を対象に検討してきた(蔭山・久世ほか1972, 久世・蔭山1973)。さらに、この自己開放性とかかわる要因として、われわれは、両親の愛情や信頼感との関連を問題とした。このうち、前者の要因については、すでに報告したので(久世・続ほか1972)、ここでは、後者の要因について検討する。すなわち「困った場面において父母の力を信頼できると認知する青年は、そうでないと認知する青年にくらべ、父母に対して、自己開放の程度が高い」であろうことを検討することを目的とする。

II 方 法

1. 質問紙作成の手続き

われわれは、困った場面において青年がどの程度、周囲の人びとに自己を開放するかを調べるために、「家庭生活」「身体・性格」「勉強・成績」「友人関係(異性関係を含む)」「学校生活(教師関係を含む)」「進学・就職」「人生・社会観」の7領域、21項目で構成された質問紙を作成した。そして、各項目について、父、母、兄弟姉妹、親友、先生にどの程度、自己を打ちあけて話すかを記述させた。打ちあける程度は、Jourard, S.M. たち(1958)を参考に、次の三段階の基準を用いて記述させる。

0: 全然打ち明けない。

1: どんなことで困っているかということだけを打ち明ける

2: すべて打ち明ける。したがって、その人はあなたがどんなことで困っているかをよく知っている

この困った場面における自己開放性に関する質問紙作成

1) 中京女子大学助教授

の手続きおよび質問紙は、他の論文(久世・蔭山1973)で報告したので、それを参照されたい。

つぎに、困った場面における問題の解決能力の信頼感を把握するため、上述の7領域、21項目のそれぞれの問題で困っている場合、父、母、兄弟姉妹、親友、先生のうち、誰の意見、判断をもっとも重要なものとして頼るかの順位づけをさせている。兄弟姉妹が2人以上いるときは、そのうち親しい兄弟姉妹について、先生は、担任の先生(指導教官)について記述させることにした。使用した質問紙は、附票に示すとおりである。

2. 整理の観点ならびに調査対象など

われわれは、困った場面における両親への信頼感と自己開放性の関連を検討するため、つぎの諸点から検討する。

(1) 父母への信頼感と自己開放性(総得点)

(2) 父母への信頼感と父母に対する自己開放性

(3) 父母への信頼感と父母に対する領域別自己開放性

つぎに、調査対象は、長野県、熊本県の過疎地域および名古屋市の中学2年生および大学生である。有効調査人員*は、過疎地中学生男子44名、女子45名、名古屋市中学生男子166名、女子164名および大学生男子194名、女子201名である。以下、名古屋市内中学生および大学生の結果をのべる**。なお、大学生の調査は、昭和46年9月上旬、名古屋市内中学生の調査は、昭和47年2~3月に実施した。

III 結 果

結果の整理は、自己開放性に関して、「全然打ち明け

*われわれは、自己開放性の実態とその要因を検討する目的で、同一被験者に調査I, IIを実施した。そのため、両調査を実施した者で、さらに、両親健在でありひとりっ子でない被験者を、有効調査人員とした。

**過疎地域の中学生の結果については、日本教育心理学会第14回総会発表論文集(1972)242~243頁を参照されたい。

困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての研究

附 票

あなたはつぎのそれぞれの問題で困っている場合、父、母、兄弟姉妹、親友、先生のうち誰の意見・判断をもっとも重要なものとして頼りますか。もっとも重要な意見・判断として頼りにする人から順に、それぞれの問題について、4、3、2、1、0と順位をつけてください。

注 意

- (i) 父、母、兄弟(姉妹)のない人は、いる人だけについて答えてください。
順位をつける人が4人の場合は、3、2、1、0としてください。
- (ii) 兄弟(姉妹)が2人以上いるときは、そのうち親しい兄弟(姉妹)についてかいてください。
- (iii) 先生は担任の先生についてかいてください。

困った場面	もっとも頼る人				
	父	母	兄弟姉妹	親友	先生
1. 家庭内にもめごと、不和のあるとき					
2. 両親が無理解なとき					
3. 家の経済状態について気になるとき					
4. 身体的な面や容姿について気になるとき					
5. 性についての知識があいまいなとき					
6. 自分の性格について気になるとき					
7. 上手な勉強の仕方がわからないとき					
8. 成績の悪い科目があるとき					
9. 勉強とクラブ活動を両立させたいとき					
10. 信頼する友だちがえられないとき					
11. 友人といさかい(けんか、口論)をしたとき					
12. 異性との交際について不安のあるとき					
13. 先生の忠告がすなおにうけとれないとき					
14. 先生の教え方について納得しにくいことがあるとき					
15. 学校生活に、はりあいがないとき					
16. 進学しようか就職しようか迷ったとき					
17. どの学校に進学すべきか迷ったとき					
18. どの職業を選択しようか迷ったとき					
19. 人生いかに生きべきかよくわからないとき					
20. 学生運動が正しいかどうか判断できないとき					
21. ある宗教の信者になるべきか迷っているとき					

ない」に0点、「どんなことで困っているかということだけを打ち明ける」に1点、「すべて打ち明ける。したがって、その人はあなたがどんなことで困っているかをよく知っている」に2点を与えて得点化した。したがって、得点の高いほど、自己開放的であることを意味している。

表1は、父、母、兄弟姉妹、親友、先生のそろっている被験者——両親健在であり、兄弟姉妹のいる被験者——について、7領域、21項目の総得点の平均(M)ならびに標準偏差(SD)を中学、大学別、男女別に示したものである。全項目とも2に記入した場合の最高可能得点は、210点になる。

表1 自己開放性

学校別	平均ならびに標準偏差		M	S D
	性別			
中学	男子		64.67	** 36.22
	女子		85.18	
大学	男子		58.41	** 32.31
	女子		91.08	

表中*印は5%、**印は1%水準で有意差のあることを示す。*、**印に関しては、以下同様である。

表1によれば、中学生および大学生は、困った事態においても、全般的にみて、自己を開放しない傾向がある。しかし、この傾向には、明らかに男女差がある。男子は、女子よりも自己を開放する程度が少ない(中・大学生とも1%水準で有意差がある)。

また、信頼感に関しては、21項目のそれぞれについて、もっとも重要な意見、判断として頼る人から順番に、4点、3点、2点、1点および0点を与えて得点化した。したがって、得点の高いほど、青年から信頼されていることを意味する。

表2は、父および母に対する信頼感について、21項目総得点の平均(M)ならびに標準偏差(SD)を、中学・大学別、男女別に示したものである。この得点は、0点から84点の間に分布する。

表2によれば、全般的にみて、中学生から大学生と年齢の進むにしたがって、女子の父に対する信頼感を除いて、父母に対する信頼感が低くなっている(1%水準で有意差がある)。これは、質問のさい、父母を兄弟姉妹、親友、先生と比較させているので、大学生においては、親友の相対的信頼感が高くなっていることと関連がある。

表2 父母に対する信頼感

学校別	性別	父		母	
		M	SD	M	SD
中学	男子	48.15 **	15.63 **	52.22 **	13.54 **
	女子	40.37		59.45	
大学	男子	40.08	14.76 **	40.10 **	13.48 **
	女子	38.05		53.36	

父母別に信頼感をみると、大学生男子を除いて、父に比べ母に対する信頼感の高いことがわかるが、中学生、大学生ともに、特に、女子の母に対する信頼感の高ことがわかる(大学生男子を除いて男女間に1%水準で有意差がある)。また、中学生・大学生ともに、男子の方が女子よりも、父に対して信頼感の高いことがわかる。この傾向は、中学生の場合に顕著に見られる(1%水準で有意差がある)。

つぎに、表2をもとに、中学・大学別、男女別、父母別に、平均から0.5σ以上を信頼感の高い群、平均から0.5σ以下を信頼感の低い群、平均から±0.5σのはばを信頼感の普通群として、それらの各群に含まれる得点の分布および人員を示せば、表3のとおりである。

1. 父母への信頼感と自己開放性(総得点)

表4は、父または母への信頼感の高低別に、自己開放性の総得点(父、母、兄弟姉妹、親友および先生の合計)の平均(M)ならびに標準偏差(SD)を、中学、大学別、男女別に示したものであり、表5は、自己開放性得点を信頼感の高低群ごとに検定した結果を示している。

表4および表5から、父への信頼感の高い群は、父への信頼感の低い群に比べ、父、母、兄弟姉妹、親友および先生を含めた自己開放性総得点の高いことがわかる。このことは、とくに女子の場合にあてはまる。ところが、母への信頼感の高低群間では、とくに顕著な差異はみられない。

2. 父母への信頼感と父母に対する自己開放性

表6は、父または母への信頼感の高低別に、父母に対する自己開放性の平均ならびに標準偏差を、中学・大学別、男女別に示したものである。また、表7は、父母に対する自己開放性を、信頼感の高低群ごとに検定した結果を示している。

表3 父母に対する信頼感の得点分布および人員

学校別	信頼感	性別 父 母	男 子		女 子	
			得点分布	人数	得点分布	人数
中 学	高	い	56 ~ 84	50	59 ~ 84	61
	普	通	41 ~ 55	59	46 ~ 58	58
	低	い	0 ~ 40	57	0 ~ 45	47
大 学	高	い	48 ~ 84	59	47 ~ 84	57
	普	通	33 ~ 47	75	34 ~ 46	75
	低	い	0 ~ 32	60	0 ~ 33	62

表4 父および母への信頼感と自己開放性

学校別	性別 父 母	平均 信頼感	男 子		女 子	
			M	SD	M	SD
中 学	父	高	66.54	34.71	93.32	33.16
		普	70.73	38.50	86.04	34.04
		低	56.77	33.55	75.07	36.24
大 学	父	高	66.84	38.27	79.32	30.66
		普	55.16	27.65	86.71	36.36
		低	73.62	39.88	90.42	37.27
中 学	母	高	66.84	38.27	79.32	30.66
		普	55.16	27.65	86.71	36.36
		低	73.62	39.88	90.42	37.27
大 学	母	高	61.73	37.12	94.57	30.03
		普	57.49	29.23	97.48	37.59
		低	56.28	30.59	79.49	31.54
中 学	父	高	61.73	37.12	94.57	30.03
		普	57.49	29.23	97.48	37.59
		低	56.28	30.59	79.49	31.54
大 学	母	高	57.11	32.98	87.14	31.28
		普	59.33	32.95	95.83	33.34
		低	58.48	30.83	89.03	37.85

表5 自己開放性の検定結果（信頼感の高低群間）

学校別	性別	男 子	女 子
中 学	父 母		*
大 学	父 母		**

表6, 表7から, 父への信頼感の高い群は, 父への信頼感の低い群に比べ, また, 母への信頼感の高い群は, 母への信頼感の低い群に比べ, 父または母に対する自己開放性の高いことを示している。また, 父への信頼感の高低と自己開放性の関連は, そのまま母のそれらとの関

表6 父または母への信頼感と父母別自己開放性

学校別	性別	対人別 平均 信頼感	父		母	
			M	SD	M	SD
中 学	男 父	高	18.80	9.88	18.42	10.52
		普	14.51	9.23	17.81	9.69
		低	9.12	7.11	13.09	8.51
大 学	男 父	高	14.92	10.83	20.26	10.10
		普	11.90	7.35	13.71	7.51
		低	15.23	9.94	14.62	10.50
中 学	女 父	高	22.02	7.74	26.92	8.79
		普	13.88	7.59	22.81	9.35
		低	7.67	8.01	20.28	10.89
大 学	女 父	高	15.00	9.79	26.79	8.25
		普	13.74	9.24	23.49	10.54
		低	15.79	9.50	18.29	8.92
中 学	男 母	高	14.59	8.86	13.19	9.06
		普	9.83	6.10	10.35	6.35
		低	6.55	5.57	10.32	7.33
大 学	男 母	高	10.89	8.53	14.19	7.86
		普	10.33	7.37	11.24	7.63
		低	9.60	6.92	8.40	6.40
中 学	女 母	高	19.86	8.99	24.58	9.45
		普	16.17	8.52	22.91	10.53
		低	8.66	7.22	19.15	9.42
大 学	女 母	高	13.83	9.41	26.22	9.58
		普	16.63	9.86	23.47	9.38
		低	14.40	8.65	16.68	9.03

連とつながっている。すなわち, 父への信頼感の高い群は, 父への信頼感の低い群に比べ, 父のみならず母に

表7 父母別自己開放性の検定結果
(信頼感の高低群間)

学校別	性別	対人別		父	母
		父母別			
中学	男子	父		**	**
		母			**
	女子	父		**	**
		母			**
大学	男子	父		**	
		母			**
	女子	父		**	**
		母			**

対する自己開放性の高いことがわかる。ただし、大学生男子を除く。ところが、母への信頼感の高い群は、母への信頼感の低い群に比べ、母に対する自己開放性は、高いのであるが、父に対する自己開放性は差異を示していない。

3. 父母への信頼感と父母に対する領域別自己開放性

表8は、父または母への信頼感の高低別に、父または母に対する領域別——家庭生活、身体・性格、勉強・成績、友人関係、学校生活、進学・就職、人生・社会観——自己開放性の平均ならびに標準偏差を、中学・大学別、男女別に示したものであり、図1、図2、図3および図4は、それらを、高低群について図示したものである。表9は、父または母に対する領域別自己開放性を、信頼感の高低群ごとに検定した結果を示している。

表8、表9、図1、図2、図3および図4から、父または母への信頼感の高い群は、父または母への信頼感の低い群にくらべ、父または母に対するほぼすべての領域——家庭生活、身体・性格、勉強・成績、友人関係、学校生活、進学・就職、人生・社会観——で、自己開放性の高いことを示している。このことは、中学生および大学生の男子、女子ともにあてはまる。

したがって、父または母への信頼感の高い青年は、信頼感の低い青年にくらべ、自己開放の程度が高いであろうとする予想を支持するものといえることができる。

表8 父または母への信頼感と父または母に対する領域別自己開放性

			家庭生活	身体・性格	勉強・成績	友人関係	学校生活	進学・就職	人生・社会観	
中 学	男子	父	高い	2.50(1.96)	2.04(1.82)	2.74(1.81)	1.30(1.65)	2.12(1.90)	4.94(1.59)	3.16(2.06)
			普通	1.93(1.75)	1.32(1.56)	2.15(2.01)	0.95(1.32)	1.56(1.54)	4.27(1.88)	2.32(1.99)
			低い	1.02(1.33)	0.61(1.06)	1.18(1.60)	0.39(0.89)	0.81(1.19)	3.47(2.33)	1.65(1.68)
		母	高い	2.87(1.96)	2.49(1.78)	3.30(1.65)	1.67(1.87)	2.56(1.73)	4.77(1.75)	2.61(2.14)
			普通	1.93(1.67)	1.34(1.43)	2.17(1.69)	0.69(0.93)	1.53(1.29)	4.12(1.90)	1.91(1.76)
			低い	2.19(1.88)	1.60(1.67)	2.04(1.97)	0.98(1.51)	1.81(1.97)	3.66(2.28)	2.34(1.94)
	女子	父	高い	2.74(1.85)	1.72(1.50)	3.46(1.62)	1.74(1.51)	2.92(1.82)	5.36(1.45)	4.08(2.04)
			普通	1.59(1.49)	0.69(0.99)	1.97(1.84)	0.66(0.92)	1.50(1.49)	4.76(1.86)	2.71(2.01)
			低い	0.72(1.26)	0.37(0.76)	0.80(1.41)	0.43(1.17)	0.61(1.33)	2.98(2.41)	1.76(1.96)
		母	高い	3.38(1.93)	3.51(1.34)	4.09(1.55)	3.21(1.73)	3.53(1.89)	5.34(1.32)	3.74(1.95)
			普通	2.97(1.92)	3.07(1.72)	3.07(1.92)	2.56(2.04)	3.14(2.02)	5.23(1.57)	3.45(2.03)
			低い	2.66(1.59)	2.37(1.68)	2.34(1.92)	1.53(1.53)	2.24(1.81)	4.71(1.89)	2.45(1.94)
大 学	男子	父	高い	2.39(1.67)	1.12(1.45)	1.80(1.78)	1.07(1.49)	1.69(1.69)	4.37(1.82)	2.15(1.88)
			普通	2.03(1.54)	0.64(0.86)	0.91(1.09)	0.27(0.55)	0.84(1.21)	3.92(1.85)	1.23(1.48)
			低い	1.45(1.48)	0.38(0.71)	0.55(0.86)	0.20(0.60)	0.43(0.88)	2.93(1.91)	0.60(1.02)
		母	高い	2.70(1.50)	1.35(1.29)	1.61(1.46)	1.05(1.28)	1.63(1.63)	4.32(1.80)	1.53(1.75)
			普通	2.40(1.62)	1.17(1.25)	1.24(1.37)	0.76(1.26)	0.99(1.33)	3.55(1.88)	1.13(1.29)
			低い	2.11(1.56)	0.73(0.85)	0.71(1.02)	0.42(0.96)	0.87(1.22)	2.71(1.95)	0.85(1.16)
	女子	父	高い	2.85(1.92)	1.34(1.30)	2.66(1.91)	1.25(1.51)	2.60(1.93)	5.18(1.41)	3.98(1.94)
			普通	2.48(1.75)	1.13(1.15)	1.77(1.73)	1.11(1.26)	1.95(1.66)	4.85(1.63)	2.88(2.15)
			低い	1.25(1.49)	0.49(0.88)	0.77(1.25)	0.34(0.87)	0.87(1.42)	3.33(2.05)	1.61(1.88)
		母	高い	3.98(1.75)	3.90(1.73)	3.16(1.61)	3.14(2.13)	3.27(1.67)	5.38(1.15)	3.38(2.05)
			普通	3.56(1.75)	3.15(1.70)	2.60(1.73)	2.76(1.90)	2.86(1.84)	5.19(1.46)	3.35(2.01)
			低い	2.77(1.53)	2.35(1.83)	1.68(1.77)	1.53(1.56)	1.75(1.51)	4.67(1.80)	1.93(1.71)

(数値は平均、なお括弧内数値は標準偏差をあらわす)

困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての一研究

表9 父または母に対する領域別自己開放性の検定結果（信頼感の高低群間）

学校別	領域別			家庭生活	身体・性格	勉強・成績	友人関係	学校生活	進学就職	人生・社会観	
	性別	父母別	父母別	父	母	父	母	父	母	父	母
				父	母	父	母	父	母	父	母
中学	男子	男子	父	**	**	**	**	**	**	**	**
	母		**	**	**	*	*	**	**	**	
大学	男子	男子	父	**	**	**	**	**	**	**	*
	母		*	**	**	**	**	**	**	**	*
大学	女子	女子	父	**	**	**	**	**	**	**	**
	母		**	**	**	**	**	**	*	**	**

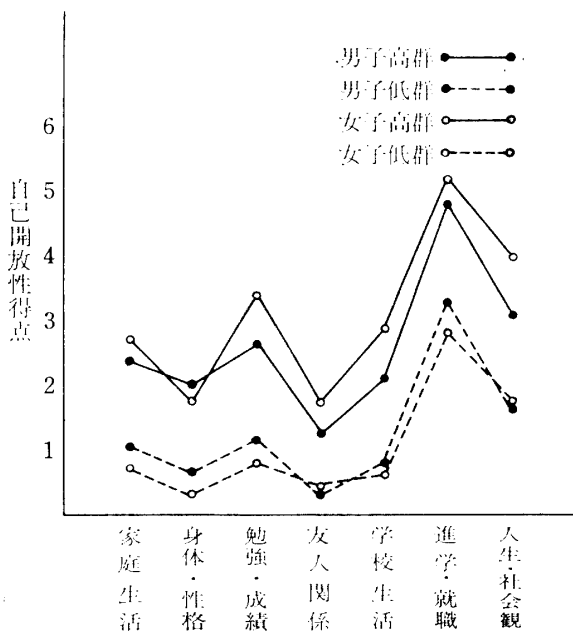


図1 中学生の父に対する領域別自己開放性

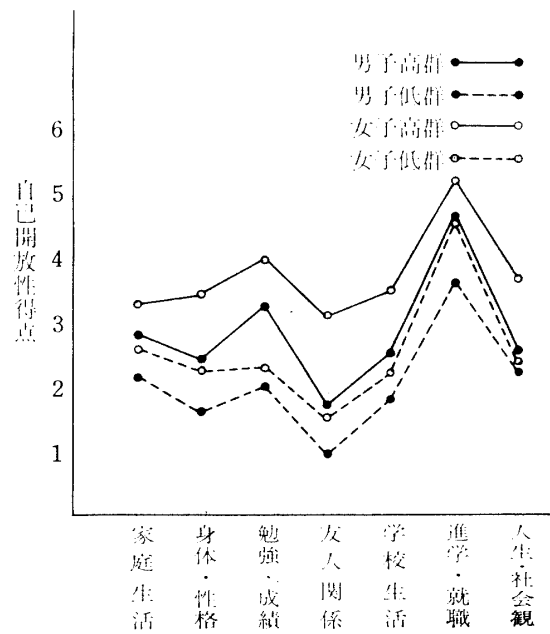


図2 中学生の母に対する領域別自己開放性

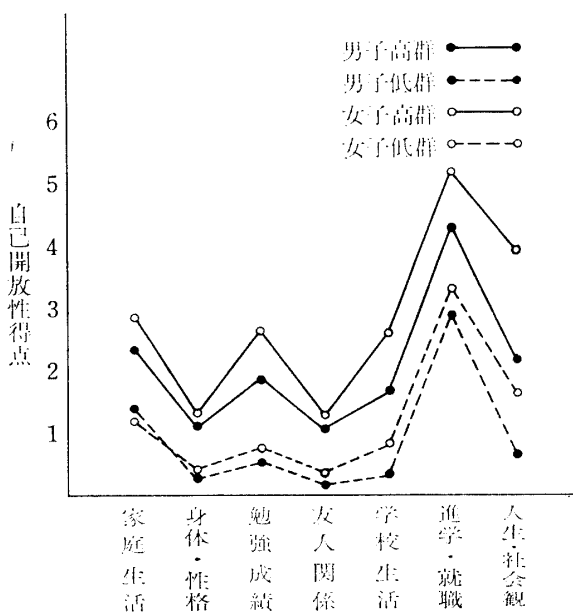


図3 大学生の父に対する領域別自己開放性

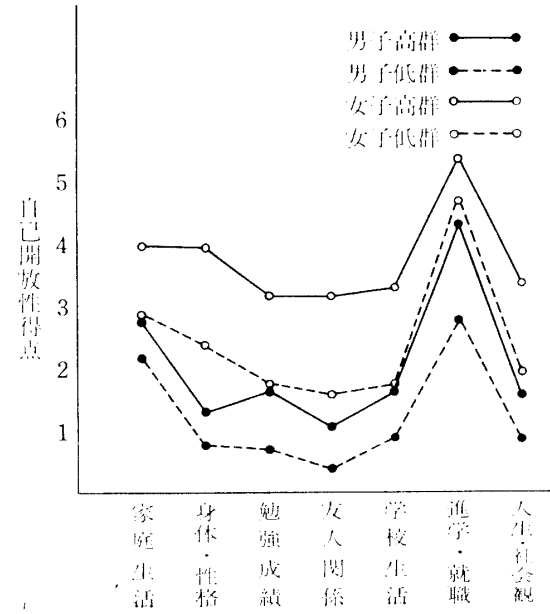


図4 大学生の母に対する領域別自己開放性

IV 討 論

われわれは、困った場面における自己開放性に関する一研究(久世・蔭山1973)において、大学生は、全般的にみて、他者に対して、自己開放的でないことを報告した。そして、この現象が、青年の一般的な状態を示すものとすれば、われわれは、自己開放的でない青年を、いかにして理解するかの問題を提起した。その際、われわれは、父母をはじめとして、周囲の人びとに対する自己開放性は、周囲の人びとへの愛情や信頼感の認知とかかわるであろうことを予想した。このうち、両親の愛情の認知と困った場面における自己開放性についての検討(久世, 続ほか1973)は、すでに報告したとおりであり、この報告は、困った場面における両親への信頼感と自己開放性に関する検討である。

われわれの結果では、困った場面における父または母への信頼感の高い青年は、父または母への信頼感の低い青年に比べ、父または母に対して家庭生活の問題をはじめ、すべての領域で、自己開放性の高いことが示された(表6, 7, 8および表9)。このことは、困った場面における青年の両親に対する自己開放性や青年の両親との対話などは、困った場面における両親の問題解決への能力すなわち信頼感とかかわることを示している。困った場面において子どもから問題解決への信頼感の高い父母は、問題解決の能力の低いと思われる父母に比べ、青年のいづく悩みなどについて、打ち明けられる機会が多いのである。このことは、さらに子どものもっている悩みなどについて相談を受ける可能性も、大きいことを意味するものといえることができる。

この結果は、困った場面における問題解決の能力を有していると信頼される両親についてあてはまるわけであるが、このことは、親友であれ、教師であれ、同様の結果が示されるものと思われる。ちなみに、われわれの調査で得られた困った場面への親友への信頼感と親友に対

する自己開放性ならびにその検定結果を示すと表10、表11のとおりであり、さらに領域別自己開放性の検定結果を示すと表12のとおりである。表10、表11および表12から、困った場面における問題解決の能力のあると信頼される親友は、その能力のないと思われる親友にくらべ、自己開放性の高いことがわかる。

このようにみえてくると、困った場面において問題解決の能力を信頼される者は、青年のもつ困った事柄を打ち明けられ、相談を受ける可能性の大きいことがわかる。

つぎに、父への信頼感の高い青年は、低い青年にくらべ、父および母に対する自己開放性は高いのであるが(表6, 7)、兄弟姉妹、親友および先生に対する自己開放性は、そのような傾向がみられず、高低群間ではば、同程度の開放性を示している——(結果の提示は省略する)——。一方、母への信頼感の高い青年は、低い青年にくらべ、母に対する自己開放性は高いが、父に対する自

表10 親友への信頼感と親友に対する自己開放性

学校別	性 別 平均ならび に標準偏 差	男 子		女 子	
		M	SD	M	SD
中 学	高 い	17.39	8.65	26.41	10.06
	普 通	15.21	8.59	23.61	8.58
	低 い	12.60	7.74	20.50	9.50
大 学	高 い	22.80	9.71	30.58	7.94
	普 通	21.63	8.73	28.53	7.79
	低 い	14.46	8.74	23.74	8.38

表11 自己開放性の検定結果(信頼感の高低群間)

学校別	性 別	性 別	
		男 子	女 子
中 学	学	**	**
大 学	学	**	**

表12 親友に対する領域別自己開放性の検定結果(信頼感の高低群間)

学校別	領 域 別 性 別	家庭生活	身体・性格	勉強・成績	友人関係	学校生活	進学・就職	人生・社会観
		中 学	男 子		**	*		*
	女 子	**	**				**	**
大 学	男 子	**	**	**	**	**	**	**
	女 子	**	**	*	**		**	

己開放性のみならず(表6, 7), 兄弟姉妹, 親友および先生に対する自己開放性は, 一義的な結果は示されていない——(結果の提示は省略する)——。このような結果のため, 表4および表5に示した自己開放性総得点を示すことになった。

この結果は, すでに報告した両親への愛情の認知の高い青年は, そうでないと認知する青年に比べ, 全体としての自己開放性が高いという結果とは, 明らかに異なっている。こうした結果が示されたのは, 愛情は, 対人間において, より根底的, 根源的な側面を示すものであり, 父や母への愛情の認知が, 他者への愛情の認知と深くかかわるのである。これに対して, 他者への問題解決の信頼感などは, まさに, 他者への能力の認知とかわるものであり, 対人間での汎化などは起こるべくもなく, 個々人への信頼感を示したことにもよるのである。また, 愛情の質問項目においては, 父母からの愛情の働きかけについての認知や父母と青年の一体感といった面の認知が中心であり, 子どもからみて父母との愛情の相互作用の認知を取り扱っているのに対して, 信頼感の質問では, 困った場面において誰の意見, 判断をもっとも重要なものとして頼るかという意味での青年の信頼感である。したがって, 質問によって得られた情報の内容の差異にも, 一部, 関連しているものと思われる。

そこで, 父への信頼感の高い青年は, 低い青年にくらべ, 父母に対する自己開放性が高いのに, 母への信頼感の高い青年は, 低い青年にくらべ, 母に対する自己開放性は高いが, 父に対するそれは, 必ずしも高くない。これは, 父への信頼感の高さが, 青年の自己開放性とつらなり, 家庭内の雰囲気, 父子—母子—子どもの関係となって現われてくるのに対し, 母への信頼感の高さは, 青年

の自己開放性とはつらなるが, 両者の関係が, 父を含めた家庭の雰囲気へは必ずしも作用しないことを意味するのでもあろう。このことは, 表5の結果をみると父への信頼感と女子の関係において, よくあてはまるのであろうか。

最後に, 父または母への信頼感および親友への信頼感の高低と自己開放性の関連について検討しよう。図5, 図6は, 中学生および大学生の父への信頼感の高低群ごとに, 父および親友に対する自己開放性を男女別に示したものであり, 図7, 図8は, 母への信頼感の高低群ごとに, 母および親友に対する自己開放性を男女別に示したものである。これらの図によれば, 父または母への信頼感の高い中学生は, 父または母に対する自己開放性が親友に比べ高い——女子の父を除く——。一方, 父または母への信頼感の低い中学生は, 父または母に対する自己開放性が親友にくらべ低い。これに対して, 大学生は, 父母への信頼感の高低にかかわらず, 親友への自己開放性の高いことがわかる——女子の母を除く——。このことは, 大学生においては, 一般に, 親友への自己開放性の高いことを物語っている。

また, 図9および図10は, 中学生および大学生の親友への信頼感の高低群に関して, 親友, 父および母に対する自己開放性を男女別に示した。これらの図によれば, 親友への信頼感の高い中学生・大学生は, 親友に対する自己開放性が父, 母に比べ, はるかに高い。一方, 親友への信頼感の低い中学生は, 父母に対する自己開放性が親友に比べ高く, 親友への信頼感の低い大学生は, 父母および親友に対する自己開放性がほぼ同様である。親友への信頼感の高低と親友に対する自己開放性の関連は, 相関関係を示しているが, 親友への信頼感の高低と父母

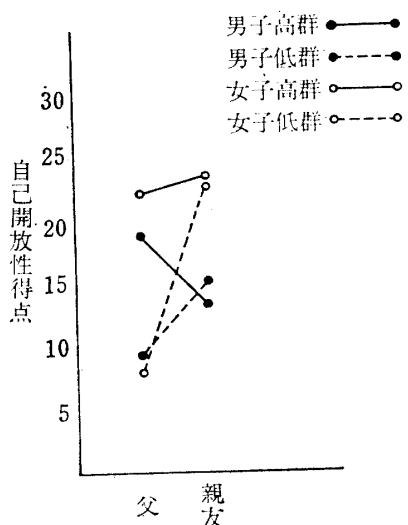


図5 父への信頼感と自己開放性(中学生)

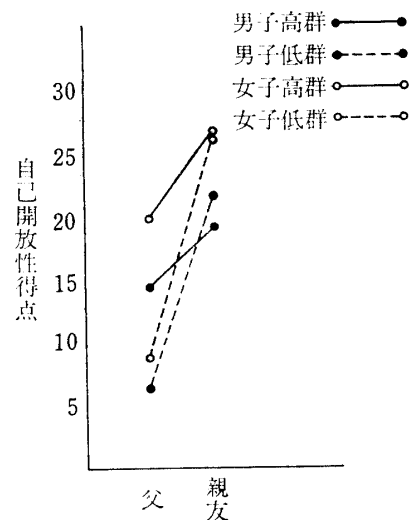


図6 父への信頼感と自己開放性(大学生)

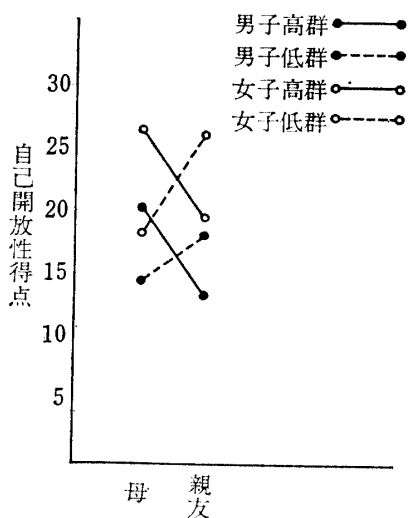


図7 母への信頼感と自己開放性 (中学生)

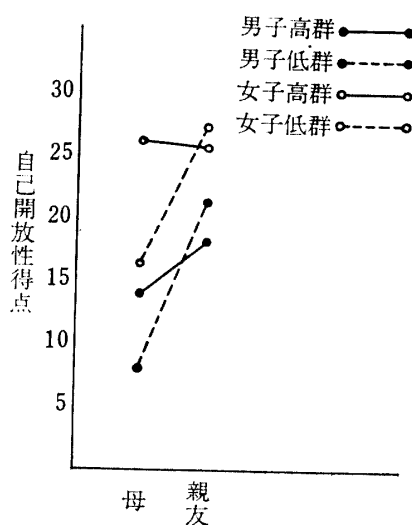


図8 母への信頼感と自己開放性 (大学生)

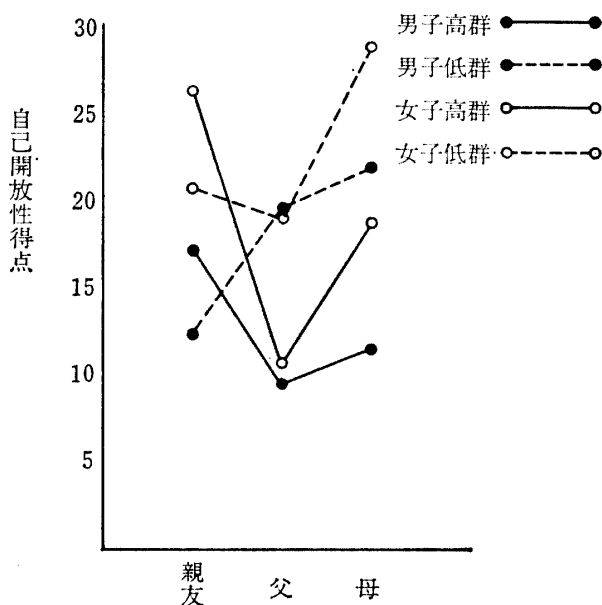


図9 親友への信頼感と自己開放性 (中学生)

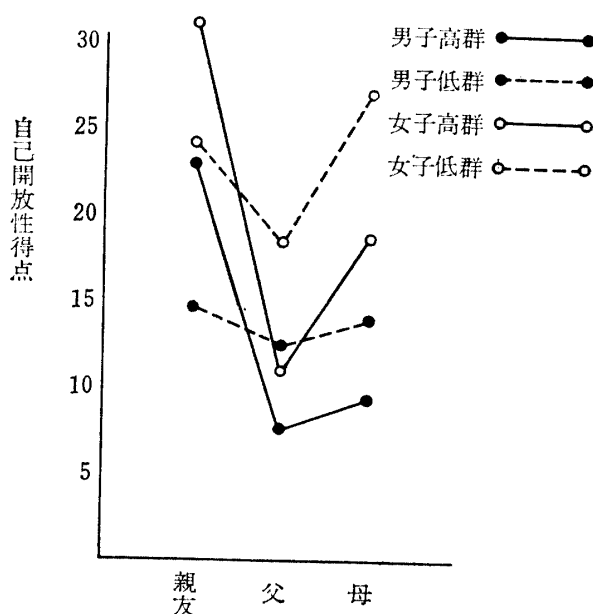


図10 親友への信頼感と自己開放性 (大学生)

に対する自己開放性の関連は、逆相関の関係を示している。そして、この傾向は、とくに、中学生において顕著のように思われる。

これらの結果は、中学生から大学生になるにしたがって、自己開放性についての親子の関係が推移してくることを示すものといえる。

以上において、われわれは、困った場面における両親への信頼感と自己開放性の関連について検討してきた。得られた結果は、困った場面において、父母の問題解決能力を信頼できると認知する青年は、父母への信頼の低い青年にくらべ、父母に対して自己開放の程度が高いということである。すでに報告した愛情の認知と自己開放

性の検討も含めて考えれば、われわれは、困った場面における自己開放性は、他者に対する愛情や信頼感の認知と密接にかかわることがわかった。自己開放性と愛情や信頼感の認知といった二要因間の相関関係のあることは、明らかになってきたのであるが、何れが独立変数であり、何れが従属変数であるかといった関係については、不明確である。すなわち、因果関係理解については、明確に答えられないままである。

われわれは、調査法——質問紙調査法によって、二変数間の関係把握に迫ったのであるが、こうした質問紙調査法において、いわば、探索的、模索的なレベルで自己開放性とそれとかかわる要因の検討を行ってきた。しか

し、両者の因果関係把握を目指す問題意識・立場からすると、このような接近法に十分満足することはできない。青年心理研究は、科学的な基盤の上に成立するものであるからして、得られたデータから、因果関係把握への方法を検討することが必要になる。そのような関係把握の方法は、実験的手法や面接法などを採用することがより有効であろう。

V 結果の要約ならびに今後の展開

われわれは、困った場面における青年の自己開放性の程度を明らかにし、それとかかわる要因の検討を行ってきた。そして、青年の自己開放性とかかわる一要因として、親への信頼感の側面をとりあげた。青年が、困った場面における問題解決の能力を、どの程度、信頼しているかの認知を問題にした。すなわち、困った場面において、父母の力を信頼できると認知する青年は、そうでないと認知する青年にくらべ、父母に対して、自己開放の程度が高いであろうことを検討することを目的とした。

この関連を検討するため、われわれは、困った場面における自己開放性に関して、「家庭生活」、「身体・性格」、「勉強・成績」、「友人関係（異性関係を含む）」、「学校生活（教師との関係を含む）」、「進学・就職」、「人生・社会観」の7領域21項目からなる質問紙を用いて、父、母、兄弟姉妹、親友および先生に、どの程度自己を打ち明けるかを記述させた。

また、困った場面における問題解決能力についての信頼感を把握するため、上述の7領域、21項目のそれぞれの問題で困っている場合、父、母、兄弟姉妹、親友、先生のうち、誰の意見・判断をもっとも重要なものとして頼るかの順位づけをさせている。

得られた結果は、つぎのとおりである。困った場面における父または母への信頼感と父または母に対する自己開放性について

(1)父または母への信頼感の高い中学生・大学生（以下青年という）は、父または母への信頼感の低い青年にくらべ、家庭生活をはじめほぼすべての領域に関して、父または母に対する自己開放性の高いことがわかる（表6, 7, 8および表9）。

上述の結果の検討にさいして、われわれは、つぎの結果を得ることができた。

(2)親友への信頼感の高い青年は、親友への信頼感の低い青年に比べ、自己開放性が高い（表10, 11）。このことは、とくに大学生の場合、ほぼすべての領域についてあてはまる（表12）。

(3)父または母への信頼感の高い中学生は、父または母に対する自己開放性が親友に比べ高く——女子の父を除く——、父または母への信頼感の低い中学生は、父または母に対する自己開放性が親友に比べ低い。大学生においては、父母への信頼感の高低にかかわらず、親友への自己開放性が高い（図5, 図6, 図7および図8）。

(4)親友への信頼感の高い青年は、親友に対する自己開放性が父母に比べ高い。一方、親友への信頼感の低い中学生は、父母に対する自己開放性が親友に比べ高く、親友への信頼感の低い大学生は、父母および親友に対する自己開放性は、ほぼ同程度である（図9および図10）。

われわれは、自己開放性とかかわる要因として、ここでは父母への信頼感の側面をとりあげた。そして、父または母への信頼感の高い青年は、そうでないと認知する青年に比べ、父または母に対して、自己開放の程度が高いであろうことを予想した。得られた結果は、その予想を支持する方向を示した。両親の力（power）に関連した問題解決の能力に関する要因の検討がなされたのである。こうして、われわれは、初期の目的を不十分ながら達成することができたのであるが、今後の問題について、若干ふれておこう。

まず、自己開放性と愛情の認知および信頼感の認知に関しては、すでに報告したとおりであるが、われわれは、このさい、愛情と信頼感のかかわりの分析を行っていない。われわれのデータについて、愛情、信頼感のともに高い青年、愛情、信頼感のともに低い青年、愛情は高く信頼感の低い青年および愛情は低く信頼感の高い青年の自己開放性の検討はなされていない。これらの検討は、今後に残された課題である。

つぎに、青年期における両親および親友の位置づけが、自己開放性に関して、とくに、愛情や信頼感の要因との関連において、どのようになされるかが問題となろう。両親への傾斜の著しい青年や親友への傾斜の著しい青年について、両要因の関連がどのようになっているのかの検討が必要である。

さいごに、われわれの得た結果は、中学生および大学生を被験者としたものであった。自己開放性に関連する要因として、他者への愛情の認知や信頼感の認知のかかわることは、高校生や大学生と同じ年令の勤労青年においても、あてはまるものであろうか。これらの関係は、教師と生徒や職場の上司と勤労青年との関係においても、適用可能か否かの検討が必要である。

おわりに

この研究を進めるにあたって、多くの方々からご協力を頂いた。結果の整理・集計に際しては、名古屋大学教育部教育統計機械室の電算機NEAC1240を使用した。水野先生や佐々木嬢らにご迷惑をおかけした。また、教室補佐員の朝日嬢にもご迷惑をおかけした。ここに、ご援助頂いた方々に深く感謝の意を表します。

文 献

蔭山英順・久世敏雄・続有恒ほか 1972 中学生の自己開放性について 名古屋大学教育学部紀要（教育心

理学科), 19, 43—50.

久世敏雄・続有恒・蔭山英順ほか 1972 両親の愛情の認知と困った場面における自己開放性についての一研究 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 19, 51—63.

久世敏雄・蔭山英順 1973 困った場面における自己開放性についての一研究 青年心理学研究会（代表依田新編）「わが国における青年心理学の発展」金子書房

PERCEPTION OF RELIANCE ON PARENTS AND SELF-DISCLOSURE IN DIFFICULT SITUATIONS

Toshio KUZE, Hidenori KAGEYAMA and "KASO" Group.

Among the factors which are related to the degree of self-disclosure in the difficult situations, the present study investigates only adolescents' reliance on their parents.

The questionnaire for the investigations is consisted of two parts. In the first part, there are twenty-one items representing seven difficult situations : (1) home and family situations, (2) physical feature and personal character, (3) academic achievement, (4) friend relationship, (5) school life and teacher, (6) educational and vocational future, and (7) philosophy of life and religion. The subjects are requested to check one of three degrees (0, 1 or 2) of self-disclosure to father, mother, brothers and sisters, friends and teachers for each item. In the second part, there are twenty-one items representing seven difficult situations mentioned above. The subjects are requested to check one of five degrees (0, 1, 2, 3, or 4) of perceived reliance on father, mother, brothers and sisters, friends and teachers for each item.

The subjects were 169 high school boys and 164 girls, and 194 college males and 201 females in Nagoya City. The investigation was conducted in September of 1971 for college, and in February and March of 1972 for high school.

The results of the investigation are as follows : (1) The more highly the subjects perceive their parental reliance, the more they disclose themselves to their parents in all seven difficult situations (Table 6, 7, 8, 9). (2) The more highly the subjects perceive their reliance on friends, the more they disclose themselves to their friends (Table 10, 11). This is the case also in college students (Table 12). (3) while the subjects highly perceiving their reliance on parents tend to disclose themselves more to their parents than to their friends in high school, the subjects in college tend to disclose themselves more to their friends than to their parents in spite of perceived reliance on parents (Figure 5, 6, 7, 8).